
カードファイト！！ ヴァンガード ～次元と未来を繋ぐ永久の絆～

天道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カードファイト！！ ヴァンガード 〽次元と未来を繋ぐ永久の絆〽

【Nコード】

N5913Y

【作者名】

天道

【あらすじ】

先導アイチ、戸倉ミサキ、櫛トシキ、葛城カムイは人間界から惑星クレイに飛ばされてしまう。

そして、惑星クレイのユニット達と共に未来を守るための戦いが始まるのだった。

設定（前書き）

ヴァンガードのオリジナル小説となります。

珍しくクロスオーバーではありません（笑）

設定

このお話はカードファイト！！ ヴァンガードの長編小説になります。

アニメと漫画の要素を加えた設定が各所あるので、この小説のイチ達は平行世界だと思っていただければ良いと思います。

それから、いくつか相違点があります。

- ・ 權を除くイチ達はシャドウパラディンの存在をまだ知らない。
 - ・ アイチは完全にPSYクオリアに目覚めていない（だが、この小説においてはPSYクオリアは全く役に立たないかもしれない）。
 - ・ アイチとミサキはお互いに惹かれ合っている？
- などなど、色々ありますが、それでも良ければ見てください。

第1話 それぞれのイメージ（前書き）

第1話はアイチ達の紹介になります。

ユニット達は第2話からの登場です。

第1話 それぞれのイメージ

『ヴァンガード』

それは、この世界で一番大流行しているカードゲームである。

そのヴァンガードのゲーム設定は地球とよく似た“惑星クレイ”を舞台としている。

惑星クレイはファンタジーの魔法だけではなく、科学技術が共に発展しており、現実世界（人間界）とは全く異なる文明が構築されている。

また、惑星クレイには神・ドラゴン・悪魔、または妖精といった存在がごく当たり前に生息している。

誰もが憧れる、夢物語で幻想的な世界。

もし、仮に誰かが考えたこの幻想の世界が本当に実在していたら…
…？

これは、人間界の先導者^{ヴァンガード}と惑星クレイの住人^{ユニット}との未来を守るための戦いの物語である。

カードファイト!! ヴァンガード
く次元と未来を繋ぐ永久の絆く

人間界の日本の東京にあるカードショップ『カードキャピタル』。
そこにてヴァンガードファイトが行われていた。

「スタンドアップ! ザ・ヴァンガード!!」

伏せたカードを表にし、プレイヤーの分身である『ヴァンガード』
が姿を現す。

「僕は“ばーくがる”にライド!」

「俺様は“バトルライザー”にライド!」

短剣を口にくわえた銀色の犬と、赤と白を基調としたロボットがフ
ィールドに現れる。

ばーくがるにライドしているのは、可愛らしい容姿をした少し引つ込み思案だが心優しき少年“先導アイチ”。

バトルライザーにライドしたのは、アイチを兄と慕う口は悪いが根は優しい少年“葛城カムイ”。

「ふん……」

それを隣の席から観戦するのは、孤高のヴァンガードファイターの異名を持つ圧倒的な実力を持つ“櫛トシキ”。

「ふわぁ……今日は珍しくこの四人だけか……」

そして、欠伸をしながらばーつとレジ席から観ているのは、カードキャピタルの店員で気が非常に強い銀髪の少女“戸倉ミサキ”。

この四人はカードキャピタルにてヴァンガードファイター四強で、代表チームの『Q4（クアドリ・フォリオ）』のメンバーである。

いつもは多くのヴァンガードファイター達で賑わっているカードキャピタルだが、今日は店内にこの四人しかない。

そして、時間が流れ、アイチとカムイのヴァンガードファイトに決着がつく。

「“騎士王 アルフレッド”でヴァンガードにアタック！」

「くっ、防ぎきれない……ノーガードです。参りました……お兄さん」

カムイのダメージが6となり、アイチの勝利となる。

「ありがとうございます、カムイ君」

「いえ、見事なファイトでした、お兄さん！ でも、次は負けませんよ！」

「僕も負けないからね！」

二人は笑い合いながらカードを片付ける。

すると、アイチはおもむろにカードをテーブルに並び初めてじっとカード達のクランを見つめる。

「ん？ どうしたんですか？ お兄さん」

「ちょっとね……惑星クレイはどんな世界なんだろうと思って……」

「惑星クレイ？ どうして急にそんなことを？」

「子供っぽいかもしれないけど、一度でも良いから惑星クレイに行ってみたいなと思って……」

アイチは恥ずかしさで頬を赤く染めながら言うと、レジ席から出たミサキが話に加わる。

「まあ、誰でも一度は考える事よね……アンタはどう思う？」

ミサキは權に視線を移して聞いてみる。

「……下らないな。そんな夢は現実に起こるはずがない」

櫛は現実的に答える。

「で、でも、イメージするのは自由だよ！　もし、櫛くんが惑星クレイに行ったらどうする？」

「俺が……？」

アイチに問われ、櫛は天井を見上げ、数秒間考える。

そして、櫛は一瞬だけ凶悪な笑みを浮かべてその質問に答える。

「そうだな……俺のイメージを超える“かげろう”達の燃えるような激しい戦いを間近で見てみたい。そう、大地を焼き尽くし、敵を殲滅する戦いをな……」

「あ、あはは……」

「アンタらしいね……」

「ってか、怖過ぎるイメージだろ……」

櫛らしい答えにアイチ達は苦笑を浮かべる。

気を取り直して次はカムイが答える。

「俺様はもちろん、“ノヴァグラップラー”達の白熱の格闘バトルをずっと見てみたい！」

「うん、カムイ君らしいね」

「男の子はみんなそうだからね」

カムイの男の子らしい答えにアイチとミサキは微笑みながらホツとし、今度はミサキが答える。

「私は……“オラクルシンクタンク”で占いをやって欲しいかな……それと、みんなとお話がしたいかな？」

「素敵なイメージですね、ミサキさん」

「へえー、ちゃんと女の子らしいところもあるんだな」

「何か言った？」

カムイの失言にミサキは目を鋭くして怖い表情で睨みつける。

「う、ごめんなさい！ 何でもありません！！」

ミサキが恐ろしくて瞬時にアイチの後ろに構えて謝るカムイだった。

そして、最後にアイチが言う。

「僕は……“ロイヤルパラディン”のみんなにお礼が言いたいです」

「「お礼？」」

「……………？」

アイチの答えに頭に疑問符を浮かべるミサキとカムイ、そして櫂。

「はい。僕がこのカードキャピタルで皆さんと出会えて本当に良かったと思っています。そのきっかけを作ってくれたこのロイヤルパラデインのみんなに一度でも良いから『ありがとう』ってお礼を言いたいです」

アイチにとってはヴァンガードは仲間達を繋ぐ大切な絆。

その答えにミサキとカムイは微笑み、櫂は小さく笑った。

「ふふっ……アイチらしいわね。でも、言い答えね」

「流石はお兄さんです！」

「ふん……」

「は、はい！　ありがとうございます！」

アイチの何気ないたった一言から始まったこの話。

しかし、この話が現実に取りかかろうとはアイチ達はまだ知らなかった。

第2話 動き出す運命（前書き）

今回はブラスター・ブレードなどのユニット達が登場します。

第2話 動き出す運命

その夜。

アイチは自室のベッドですやすやと眠っていると、机の上においてデッキが突然淡い光の輝きを放つ。

更に、デッキのみならずロイヤルパライデインのカードが全て輝いてそのまま宙に浮いた。

カード達は舞うように飛んで寝ているアイチの周りをクルクルと回る。

そして、カード達が光の球体となってアイチの体の中に入っていた。

アイチの体が一瞬光ると、体から巨大な閃光が吐き出され、そのまま窓をすり抜けて空へと飛んで行った。

そして……惑星クレイに信仰と科学技術を融合させた正義と秩序を重んじる聖域国家があった。

国家の名は聖域連合“ユナイテッド・サンクチュアリ”。

そのユナイテッド・サンクチュアリに巨大な神社や神殿が合わさった場所があった。

それは信託魔法や未来予知、占術などの魔法や科学技術を駆使してコンサルティングや経済予測業務を行う巨大企業。

言わずもがな、その企業はオラクルシンクタンクである。

そのオラクルシンクタンクで働く銀髪の可愛らしい一人の少女が息を切らせて急いで走っていた。

「はっ、はっ、はっ……急が、ないと……！」

何かを焦っているようで、少女は大きな扉の前に到着すると、すぐにその大きな扉を開けた。

「失礼します、アマテラス様……！」

部屋に入ると、少女の目的の人物が資料と和菓子を手に持って椅子に座っていた。

「な、何じゃ！？ ロゼンジよ、我はちゃんと仕事をしておるぞ……！」

持っていた和菓子を慌てて隠し、驚いているのは、長い黒髪と身に包んだ豪華な和服が特徴の美女だった。

この美女こそオラクルシンクタンクの代表取締役の“CEO アマテラス”である。

そして、走って部屋に飛び込んで来た少女はオラクルシンクタンク屈指の天才占い師“ロゼンジ・メイガス”。

「アマテラス様……今すぐに、お伝えしたいことが……」

ロゼンジ・メイガスはアマテラスにあることを伝えるために走って来たのだ。

「取りあえず落ち着くのじゃ。ほれ、我がさつきいれたお茶を飲むのじゃ」

「あ、ありがとうございます……」

ロゼンジ・メイガスは渡されたお茶をグイッと一息に飲み干して大きく深呼吸する。

「はあ……ふうー……では、アマテラス様。本題に入ります」

「うむ。聞かせてくれ」

「はい。先程、私の頭の中に突然ある映像が浮かびました」

ロゼンジ・メイガスは予言だけではなく、直近の未来であれば頭の中に映像として知覚することが出来る。

「どんな未来が見えたのじゃ？」

アマテラスは固唾を吞んでロゼンジ・メイガスの言葉を待つ。

「私達の先導者……ヴァンガードがこのユナイテッド・サンクチュアリに降り立ちました」

ロゼンジ・メイガスの言葉にアマテラスは目を見開き、ガタツと椅子から立ち上がった。

「それは誠か!？」

「はい。しかし、私達オラクルシンクタンクのヴァンガードだけではありません。同じくユナイテッド・サンクチュアリのロイヤルパラディン。“ドラゴン・エンパイア”のかげろう。“スター・ゲート”のノヴァグラップラーのヴァンガードも降り立っています」

「そうか……よし、ロゼンジよ。今すぐに戦闘教団のバトルシスターの何人かを引き連れて我らのヴァンガードの保護に向かうのじゃ！」

「はい！ あつ、ロイヤルパラディンのヴァンガードはどうなされますか？ 恐らく、私達のヴァンガードの近くにいると思われますが……」

「それなら心配ない。すぐに騎士王殿と連絡を取ってロイヤルパラディンから精鋭の騎士達を出すよう要請する。もし“奴ら”が現れたら騎士達と協力してヴァンガード達を必ず護るのじゃ」

「わかりました。それでは、すぐに向かいます！」

「頼むぞ、ロゼンジ！」

ロゼンジ・メイガスはアマテラスに一礼すると、部屋を飛び出してまた走る。

「ロイヤルパラディンの騎士王はともかく、ドラゴン・エンパイヤとスター・ゲートは耳を貸すかどうか……まあ、やるだけやってみるかの」

アマテラスはすぐに回線を開いてロイヤルパラディンの騎士王と連絡を取る。

同時刻、ユナイテッド・サンクチュアリに一際目立ってそびえ立つ城がある。

そこは、ユナイテッド・サンクチュアリを守護する人間、妖精（エルフ、フェアリー）、神（神族、エンジェル）で構成された正規軍・ロイヤルパラディンの本拠地である城である。

その城のとある執務室にて、一人の男がペンを器用に回しながら書類整理をしていた。

豪勢な机の隣には青と白の鎧と剣が置かれていた。

何を隠そう、この男が若くしてロイヤルパラディンを率いる最強の騎士にて、偉大なる騎士達の統率者“騎士王 アルフレッド”である。

すると、『ピピピ……』と突然外部からの連絡が入り、男性はペンを机に置いて連絡に出る。

「誰だ？ もしもし？」

『仕事中申し訳ないな、騎士王殿よ！』

連絡先がオラクルシンクタンク代表取締役のアマテラスにアルフレッドも驚く。

「一体どうなされたのですか？ アマテラス殿直々に連絡をくれるとは……」

『うむ、実はこの。今すぐにお主に伝えることがあるのじゃ』

「伝えること？」

『よく聞くのじゃ。お主達ロイヤルパラディンのヴァンガードが近々ユナイテッド・サンクチュアリに現れるのじゃ！』

「それは本当ですか！？」

『ロゼンジ・メイガスが見た未来の映像じゃ。間違えるわけがない！』

「わかりました。すぐに騎士団から精鋭騎士を派遣してヴァンガードの保護に向かいます」

『流石は騎士王。頭の回転が早い奴じゃ！ 今、ロゼンジ達がバトルシスターを連れて我らのヴァンガードの保護に向かっている。こちらも早急に頼むぞ』

「わかりました。それでは、失礼します」

『それじゃの！』

アマテラスは通信を切り、アルフレッドは椅子から立ち上がる。

（すぐに騎士達に召集をかけなければ……！）

アルフレッドは若干焦りながら置いてある鎧を身に纏う。

コンコン！ ガチャ！

「失礼します。騎士王、今度の模擬戦についてお話しが……」

ノックをしてアルフレッドの部屋に入ってきたのは、ロイヤルパラディンの精鋭騎士にしてユナイテッド・サンクチュアリの英雄“ブラスター・ブレード”である。

「ブラスター・ブレード！？ 全く、ナイスタイミング過ぎるぞ、お前は！！」

「……はい？」

ブラスター・ブレードはキョトンとし、目を丸くする。

「ブラスター・ブレード。模擬戦の話は後にして、今から緊急にして重要な任務を言い渡す」

アルフレッドの騎士王としての重みのある言葉にブラスター・ブレードはすぐさま跪いき、一つ頷いた。

「承知しました、騎士王。それで、その任務の内容とは？」

「それは、この地に訪れた我々のヴァンガードの保護だ」

「ヴァンガード！？ では、彼が遂に……！！？」

ブラスター・ブレードは一瞬信じられないと言わんばかりの表情をする。

「これは、オラクルシンクタンクからの確かな情報だ。今、彼女達もオラクルシンクタンクのヴァンガードの保護に向かっている。ブラスター・ブレードよ。部下達を引き連れて我らロイヤルパラディンのヴァンガードの保護を命ずる」

「はっ！ この命と剣にかけて、必ず我らのヴァンガードを御守りいたします！！」

ブラスター・ブレードは腰に差した、名を受け継いだ同じ勇気を力に変える剣を持って騎士王に言う。

「頼むぞ。アマテラス殿も恐らく危惧している敵の襲撃も予測できる。すぐに向かってくれ！」

「はっ！！」

ブラスター・ブレードは返事をする、アルフレッドに一礼をして執務室から出る。

そして、数人の部下と一匹の相棒を引き連れてブラスター・ブレードは城から出撃する。

（待っている、マイヴァンガード。すぐに行く！）

第3話 覚醒した力と出会い（前書き）

今回、アイチ君が頑張ります！

そしてブラスター・ブレード達との出会いです！

第3話 覚醒した力と出会い

ユナイテッド・サンクチュアリの郊外の野原にて少年が眠っていた。その少年は地球の自室で眠っていたはずのアイチだった。

アイチは頬を撫でる優しい風に意識が覚醒し、ゆっくりと目が覚める。

「ん……んっ……」

「あっ！ アイチ、起きた？」

「ミサキ、さん……？」

アイチの顔のすぐ近くにミサキの顔があった。

（どうしてミサキさんが……？ そう言えば、枕の感触がいつもより良いような……）

「ふふっ。私の膝枕、どうかな？」

少し意地悪そうな笑みを浮かぶミサキにアイチは顔が少しずつ真っ赤になる。

ミサキは女の子座りをして、自分の膝にアイチの頭を乗せていた。

「えっ？ えっ？ ええっ！？」

アイチは慌ててミサキの膝から頭を離した。

「ミサキさん、ごめんなさい！」

「どうして謝るの？ 寝ているアイチに勝手に膝枕をしてあげたのは私だから、謝らなくて良いんだよ。こういう時に言う言葉はありがとうじゃない？」

「えっ、あ、はい……ありがとうございます、ミサキさん……膝枕、凄く心地良かったです」

アイチは相変わらず顔を真っ赤にしながらミサキに礼を言い、ミサキは満足そうに微笑んで頷く。

そして、アイチは周りをキョロキョロと見渡す。

「ところで……ここはどこですか？」

「さあ？ 少なくとも、地球じゃなさそうよ」

「どうしてわかるんですか？」

「あれよ」

ミサキが指差した先をアイチが見る。

そこには、巨大な建物が幾つもそびえ立つ近未来的な国があった。

「あれは……もしかして……」

「ええ。私も信じられないけど……」

アイチとミサキは同時に頭に過ぎった答えを言う。

「「ユナイテッド・サンクチュアリ」」

自分の持つデッキの所属する国家がすぐ近くにあるのは普通に考えれば有り得ないことだが、アイチとミサキは直感でそれがユナイテッド・サンクチュアリだと分かった。

「これは夢かな……？」

「夢みたいだけど、現実みたいな感じがするよ……行こう、アイチ！」

ミサキはアイチの手を引いて走り出した。

「ミ、ミサキさん!？」

「早く早く! 夢が覚めない内に早く行こう!」

普段のミサキは気怠そうにしているが、今のミサキは年相応の可愛らしい笑顔をしていて、アイチにはキラキラと見えている。

(ミサキさん……とっても可愛いです……!)

アイチはミサキにバレないように俯いて顔を先程より更に赤くする。

アイチとミサキは早速ユナイテッド・サンクチュアリに入ると、二人の目はキラキラと輝いた。

「す、凄い……！」

「ここが、ユナイテッド・サンクチュアリ……！」

聖域国家と呼ばれるユナイテッド・サンクチュアリは近未来的な建物が広がり、無数の空間ディスプレイが宙に浮いていてニュースや宣伝が流れていた。

道行く歩行者達の服装もかなり変わっており、ここがアイチとミサキの住んでいる世界とは違うと実感できる。

「ミサキさん、オラクルシンクタンクの本部に行きませんか？」

アイチの提案にミサキはぱあつと輝く。

「えっ！？ いいの？」

「はい。僕は後でも良いので先にミサキさんからどうぞ」

「ありがとう、アイチ！ ああつ、本当に楽しみだな……」

ミサキは手を組んでオラクルシンクタンクのみんなに会えるのを心から楽しみにしていた。

「それじゃあ、まずは誰かにオラクルシンクタンクの本部の場所を聞きましようか」

「そうね。それと、ロイヤルパラディンの本拠地もね」

アイチとミサキは観光気分もとい、デート気分でユナイテッド・サンクチュアリを楽しもうとする。

しかし、この惑星クレイに呼ばれた意味をまだ知らないアイチとミサキに危機が迫る。

トガアアアアアン！！！！

突如、巨大な爆発音が鳴り、アイチとミサキは振り向いた。

「な、何ですか！？」

「爆発音……まさか、テロ！？」

そして、爆発の煙の中からおぞましい姿をした異形が現れる。

それは、凶悪な姿形の人型の化け物だったが、肉体の半分以上が機械に改造されたサイボーグでもあった。

「見つけたぞ……選ばれし先導者！！」

「生け捕りにしろ！　それが出来なければ殺せ！！」

異形は10体も存在し、目的はアイチとミサキだった。

「僕たちが狙い！？」

「逃げるよ、アイチ！」

ミサキはアイチの手を取って逃げようとする。

「逃がすか！　やれ、“ヘルビースト”！」

異形が叫ぶと、アイチとミサキの視線の先の地面が黒く変色して中からドロドロとした気色悪い液体を身に包んだ獣が現れた。

ヘルビーストは2体現れ、高速で駆けてアイチとミサキに襲いかかる。

「グルアアアア!!」

「きゃっ!?!」

「ミサキさん!?!」

ミサキはヘルビーストに襲われ、腕を爪で引っかれてそのまま後ろに倒れる。

アイチが慌ててミサキを受け止めるが、ミサキは苦痛の表情を浮かべていた。

「ミサキさん! 大丈夫ですか!?!」

「あつ、がつ……」

体が震え苦しそうに呼吸していて、話すこともままならない。

「まさか、あのヘルビーストの爪に毒が!?!」

「その通り。ヘルビーストの持つ毒は死には至らないが、数時間は肉体に凄まじい苦痛を味わうことになる」

異形がヘルビーストを手懐けてゆっくり二人に近づく。

「さあ、ヴァンガードよ。我らに投降しろ」

「……断る」

アイチは眼に怒りを込めながらミサキを片腕で抱きしめて、異形達を睨みつける。

「……仕方ない。ヘルビースト！」

異形はヘルビーストを離し、アイチに襲わせる。

アイチはゆっくり眼を閉じ、空いている右手を握りしめて自分の胸へと持つて行く。

（お願い……僕に……力を……！）

アイチの願いに反応し、体から青白い光の粒子が溢れる。

（ミサキさんを護るための力を僕に……！）

その願いに応えるようにアイチの握った手に一枚のカードがあった。

アイチは目を開いてそのカードを高く掲げた。

「立ち上がれ、僕の分身！」

アイチは青白い巨大な光に包まれ、その光は天を貫く。

異形やヘルビースト達はその光に立ちすくんでしまう。

そして、アイチは光を払うように叫んだ。

「ライド！ ブラスター・ブレード！！」

光が払われ、中から現れたのは、ブラスター・ブレードの剣を右手に持ち、鎧を身に纏ったアイチだった。

左腕でミサキを抱き上げており、ミサキは苦痛で意識が失いそうなか、変身したアイチの姿に驚きを隠せない。

（アイチ……？）

対峙する異形達は目の前で起きた事態に焦りの表情を見せた。

「くっ！ 早くもヴァンガードの能力を目覚めさせてしまったか！！」

「だが、まだその能力を扱い切れてないはずだ！ 今の内に叩けば問題ない。ヘルビースト！！」

ヘルビーストは牙をギラリと見せて再びアイチに襲いかかる。

（イメージするんだ。ブラスター・ブレードみたいに！）

アイチは頭に浮かんだイメージを実現するかのように剣を巧みに片手で操り、襲ってきたヘルビースト達を切り裂いた。

「何だと！？」

異形達が驚き、アイチは剣を高く掲げて呟く。

「行くよ……勇気を力に変える剣、ブラスター・ブレード」

剣の刀身が中心を残して左右に展開される。

そして、刀身から光が放たれ、巨大な光の剣へと変化して天まで伸びる。

「うおおおおおおおっ！！！」

アイチは一気に光の剣を振り下ろす。

「バースト・バスターアアアアー!!!」

光の剣は異形達に直撃し、一瞬の閃光が辺りを包み込んだ。

剣が纏う光が消えると同時に刀身が元に戻り、今の攻撃で大幅に体力を消耗したアイチは剣を地面に突き刺して杖代わりにする。

「はっ……はっ……やっつけた……？」

しかし、煙が晴れると信じられない光景があつた。

「がつ、あつ……」

「貴様、ら……」

何と、異形達は自分の仲間を数体を盾にしてアイチの光の剣を受け止めたのだ。

「自分の仲間を盾に……!？」

「よくやったぞ。これでヴァンガードを簡単に捕まえることが出来る」

異形は盾にした仲間を無造作に捨てる。

「くっ……！」

アイチは歯を食いしばって無理矢理立ち上がり、剣を構え直す。

「今度こそお終いだ、ヴァンガード……！」

今度は異形達がアイチとミサキに襲いかかる。

「ロゼンジ・シールド……！」

突如、アイチとミサキの前に高密度の魔力で生成された巨大なひし形の防護シールドが現れ、異形達を弾いた。

「お待たせして申し訳ありません、ヴァンガードのお二方！ 私はオラクルシンクタンクのロゼンジ・メイガスです！」

アイチとミサキの前に現れたのは、ロゼンジ・メイガスだった。

その後ろに三人組のシスターがいた。

「私は戦闘教団の“バトルシスター もか”」

三人組のリーダーでミサキと同じように脚を見せる服装をしている
“もか”。

「私は“バトルシスター ここあ””。よろしくね♪」

服の下にナイフを常備している戦闘教団一のサディスティックな性格の“ここあ”。

「わ、わ、私は“バトルシスター しょこら”！」

気弱そうな姿とは裏腹に機関銃を軽々と持つ“しょこら”。

「オラクルシンクタンクの皆さん……来てくれたんですね……」

アイチは思わぬ援軍に安堵の笑みを浮かべる。

しかし、ロゼンジ・メイガスは首を横に振る。

「いいえ。私達だけではありませんよ。ロイヤルパラディンのヴァンガード様」

「えっ？」

アイチの後ろに複数の足音が近づき、アイチはゆっくり振り向いた。

そこにいた人物達にアイチは一瞬だけ目を疑ってしまった。

それは、アイチが今までずっと会いたがっていたロイヤルパラディンの騎士達だった。

「遅くなって申し訳ありません、マイヴァンガード。私はロイヤルパラディンの光剣、ブラスター・ブレードです」

騎士達の先頭にはアイチの象徴にして切り札的存在のブラスター・ブレードがいた。

「我は……“沈黙の騎士 ギャラティン”……」

ブラスター・ブレードの後ろには両目を布で隠した魂を感じ取る騎士“ギャラティン”。

「僕は“小さな賢者 マロン”です！」

後ろにはブラスター・ブレード達より二回り大きい巨人族の少年“マロン”。

「俺はロイヤルパラディンハイビースト部隊の“ういんがる”だ！」

そして、ブラスター・ブレードの相棒の戦闘犬“ういんがる”が前に出て来た。

「ブラスター・ブレード、みんな……」

アイチは嬉しさのあまり、目から涙が流れる。

ブラスター・ブレードは一つ頷くと、眼を細めて異形達を睨む。

「貴様等だな？ 我らのヴァンガードを狙う輩は。だが、もうこれ以上手出しはさせない！」

ブラスター・ブレードは剣を両手で構える。

そして、その身から溢れんばかりの氣に異形達に思わず後ろに下がってしまう。

「ギャラティン、私と共に奴らを討つぞ！ ういんがるとマロンは後方支援とヴァンガード達を守れ……！」

「承知……！」

「おう！ やっちゃえ、ブラスター・ブレード……！」

「はい！ お任せください！」

ブラスター・ブレードからの指示にギャラティンとマロンとういんがるは頷いて位置に着く。

ロゼンジ・メイガスもバトルシスター達に指示を出す。

「もか、ここあ、しょこら。ロイヤルパラディンの騎士様と協力して敵を倒してください」

「わかりました、ロゼンジ様」

「お任せあれ……」

「は、はい!!」

バトルシスター達はブラスター・ブレードとギャラティンの隣に立つ。

すると、ロゼンジ・メイガスは手を伸ばしてミサキの傷に触れた。

「今、私の治癒魔法で傷と毒を癒やします」

ロゼンジ・メイガスは治癒魔法でミサキを苦しめる毒を消し、傷を癒やした。

「ミサキさん、よかった……」

苦しそうだったミサキの表情が穏やかになり、アイチも安心する。

そして、ブラスター・ブレードは剣を異形達に向ける。

「行くぞ!!」

ブラスター・ブレードが先陣を切って突撃し、ギャラティンやバトルシスター達が後に続く。

第4話 お酒と酒癖と本音（前書き）

取りあえず、これでストックは使い切りました。

今回は……タイトルの時点で不安が（笑）

第4話 お酒と酒癖と本音

それからブラスター・ブレード達は異形達を僅か数分で倒し、ユナイテッド・サンクチュアリに訪れた危機を退けた。

アイチとミサキはブラスター・ブレードやロゼンジ・メイガスがすぐに保護し、一体何が起きているのかを説明するため、ロイヤルパラディンの城に案内された。

城に設けられた一番大きな会議室に入ると、そこに驚くべき人物がいた。

「来たか。待っていたよ、マイヴアングード」

「おお！ よかった、無事であつたか！」

ロイヤルパラディンとオラクルシンクタンクのトップ、騎士王 アルフレッドとCEO アマテラスである。

アルフレッドとアマテラスはアイチとミサキに近付いて握手する。

「ロイヤルパラディンの騎士王 アルフレッド。アルフレッドと呼んでくれ、マイヴアングードよ」

「あつ、は、はい！ よろしく、アルフレッド！」

「アマテラスじゃ。我のことは好きに呼んでくれて構わぬぞ」

「う、うん！ 私は戸倉ミサキよ。ミサキって呼んでね」

お互いの挨拶を済ませると、アイチとミサキを席に座らせてアルフレッドとアマテラスが説明を始める。

「全ての事の始まりはオラクルシンクタンクの予言者達の予言から始まった」

「予言……？」

アルフレッドの出だしから既にアイチとミサキは疑問符を浮かべる。

「その予言はこうじゃ……『未来から悪しき者達現れる時、人間界から我らを導くの先導者が現れる。そして、世界の存亡をかけた大いなる戦が始まる』……とな」

アマテラスの言う予言にアイチとミサキはハツとする。

「もしかして、その先導者は……」

「私達……？」

アルフレッドとアマテラスは同時に頷く。

「しかし、あなた達二人だけではない」

「現在、お主ら以外に他で確認できたヴァンガードはかげろうとノヴァグラッパの二つじゃ」

「かげろうとノヴァグラッパと言えば……」

「あの二人しかいないよね……」

アイチとミサキの頭には当然チームメイトの二人が思い出される。

「アマテラス殿。取りあえず、これからどうするかの話し合いは明日にして今日は二人を休ませましょう」

「そうじゃな、騎士王殿。心の整理も必要じゃからな。ミサキ、一緒にオラクルシンクタンクに行くぞ！」

「えっ？ えっと、その……」

ずっとオラクルシンクタンクに行きたかったミサキだが、何故か渋った。

「ミサキさん、どうしたんですか？」

アイチがミサキの顔をのぞき込むと、ミサキはアイチから視線を反らした。

「な、何でもないよ！」

そのミサキの反応にアマテラスは瞬時に気づいた。

（ほほう……なるほどのお。ミサキはあの男に……）

アマテラスは思わず顔のニヤケが止まらず、着物の裾で口を隠してアルフレッドの方を見る。

「騎士王殿、すまぬが今日はそちらでミサキを預かってもらえぬか

？ 残念ながら今日は我が社はいつもより忙しいのでな」

「ええ、私達は構いません。責任を持ってあなた方のヴァンガードをお預かりします」

アマテラスの思惑を全く知らないアルフレッドは平然と答える。

「感謝するぞ、騎士王殿。と言うわけで、ミサキよ。ロゼンジを世話係として残すから今日はこっちで泊まってくれるかの？」

「えっ？ べ、別に構わないけど……」

そして、アマテラスはミサキに近付いて耳元で囁く。

「良いか、ミサキ。惚れた男を自分のモノにするコツは大胆じゃぞ。特にこの男は気が弱そうじゃから今夜に夜這いでもすれば一発オーケーじゃ！」

アマテラスはグッドサインをしながらの爆弾発言に乙女心真っ盛りのミサキは顔が真っ赤になる。

「バ、バ、バカアアアアアアアッ！！」

「ゴブアッ！？」

ミサキは得意の蹴りでアマテラスを蹴り飛ばす。

「ミ、ミサキさああああああん！？」

「アマテラス殿おおおおおっ！？」

アイチとアルフレッドは突然の事態に目を見開いて驚愕する。

それもそうである。

大企業の社長が女子高生に蹴り飛ばされるなんて聞いたことも見たこともないのだから……。

その後、伸びているアマテラスはバトルシスター達に運ばれてオラクルシンクタンク本社に戻ったのだった。

そして、アイチとアルフレッドはミサキとアマテラスの間に何があったのか聞くのが怖かった。

聞いたらアマテラス同様に蹴り飛ばされと思ったからだ。

その夜、ロイヤルパラディンの城でヴァンガードのアイチとミサキの歓迎会が行われた。

広い食堂に多種多様にして個性豊かなロイヤルパラディンの騎士や剣士達、更には沢山のハイビースト達も参加して歓迎会は大賑わいだった。

歓迎会の主役のアイチはこの場にいるロイヤルパラディン全員に挨拶して回った。

今までも……そして、これからも共に戦っていくロイヤルパラディンの仲間達と絆を深めていきたいからだ。

アイチは挨拶を回り終えると、ジュースを持って一旦食堂を出て中庭に向かった。

既に日は落ち、ユナイテッド・サンクチュアリの夜空に星が広がっていた。

（本当に来たんだな、惑星クレイに……）

アイチはまだ夢の中にいるような気分だった。

「どうなされました？ ヴァンガードよ」

「あ、ブラスター・ブレード」

そこにアイチを探しにブラスター・ブレードが訪れた。

「あはは。ちょっと落ち着きたい気分だったからね」

「申し訳ありません。我が騎士団の者達はみんな、宴会が好物みたいなものですから」

「そうなんですか？」

「ええ。騎士王は特にお祭り騒ぎが好きで、何か良いことがある度にこうしてみんなで宴会をやるのですよ」

ブラスター・ブレードは自分の盟友の困った一面に苦笑しながらアイチの隣に立つ。

「へえー、何か意外ですね」

「幻滅なされましたか？ 誇り高き聖騎士団の実態をご覧になされて……」

「そんなことはありません！ 寧ろ、前よりもっとロイヤルパラデインのみんなが大好きになりました！！」

アイチは自分が本当にロイヤルパラデインが好きだという事をブラスター・ブレードに伝えるために満面の笑みを見せた。

「ありがとうございます。マイヴァンガード」

アイチの気持ちが伝わったブラスター・ブレードは微笑んだ。

すると、アイチは少し不機嫌な表情を見せた。

「あの、ブラスター・ブレード。そのヴァンガードって呼び方、止めてくれるかな……？」

「えっ？」

「さっき、挨拶する時にみんなにも言っただけど、僕のことをアイチって名前で呼んでくれるかな？ それから、敬語じゃなくて自

分の話しやすい言葉で喋ってくれないかな？」

「マイヴァンガード……」

「お願い、ブラスター・ブレード」

アイチは手を合わせてブラスター・ブレードに頼み込む。

「わかりました。では……ごほん！」

ブラスター・ブレードは咳払いをして敬語を止めて自分の言いやすい言語にする。

「改めて……これからよろしく頼む、アイチ」

「はい！ ブラスター・ブレード！」

アイチとブラスター・ブレードは握手して絆を深めた。

すると……。

「アイチ様〜！ ブラスター・ブレード様〜！」

ロゼンジ・メイガスがテテと走ってきた。

「どうしたんですか？」

「た、大変です！ ミサキ様が大暴走していますー！」

「……はい??？」

アイチとブラスター・ブレードはその意味を理解出来ていなかった。
取りあえず二人はロゼンジ・メイガスの案内で食堂に戻った。

そして、そこには信じられない光景が広がっていた。

「ふははははあ！　こんなもの！？　ユナイテッド・サンクチュアリを守護する聖騎士は！！」

ワインボトルを片手に次々と騎士達を蹴り倒すミサキの姿があった。
ミサキに蹴り倒されている騎士達の中にはロイヤルパラディンで名のある聖騎士が何人も含まれていた。

そして、一人、また一人とミサキに蹴り飛ばされて倒れていく騎士達の哀れすぎる姿……。

「バ、バカな……ロイヤルパラディンの騎士達が……」

「ロゼンジ・メイガスさん。一体何があったんですか……？」

「実は、騎士の皆様がミサキ様にアルコールの弱い果実酒を勧めたんです。アルコールが弱いなら大丈夫だろうとミサキ様も思い、一口飲んだら……」

後はもう聞く必要はなかった。

アイチ達はミサキの酒癖の悪さに呆然とするしかなかった。

しかし、さすがにこのままにしておくわけには行かないので、アイチが止めに行く。

「ミ、ミサキさん……」

「んう？ あ、アイチだあ！」

ミサキはアイチを見ると普段絶対に見られないような無垢な笑みを浮かべて足を下ろした。

「ねえ、アイチ！ このおしゃけおいしいよ！ 一緒にのもつよお！」

遂に呂律も可笑しくなりながらアイチに近づく。

「え、えっと……まだ僕は中学生ですから遠慮します……」

「むう！ 私のお酒が飲めないのかあー！」

「と、とにかく！ ミサキさんはもう飲んじゃダメです！」

アイチはミサキからワインボトルを奪い取り、そのままブラスター・

ブレードに投げ渡す。

「ああつ！ 何しゆるの、私のおしゃけえ〜！」

「ミサキさん、もう寝ましょう。部屋に連れて行きますから。ねっ
？」

「むう〜〜っ！」

ミサキは頬を膨らませながらアイチに連れて行かれた。

そして、ブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスは同時にため息を付いた。

「何とか収まったか……」

「ミサキ様にお酒を飲ませない方がよろしいですね。被害が尋常ではありません……」

「では、気を取り直して静かな場所でロゼンジ殿も一杯如何ですか？ 流石にここだと少々騒がしいですから」

ブラスター・ブレードはミサキが持っていた果実酒を見せる。

「はい、喜んで。ブラスター・ブレード様」

ロゼンジ・メイガスは若干頬を染めながら笑顔でその誘いを受けた。

一方、ミサキに用意された一室でアイチは疲れ果てていた。

「つ、疲れた……」

酔ったミサキを食堂から部屋まで連れて行くのに一苦労だった。

何故なら、突然暴れたり勝手にどこかに行こうとしたりとアイチを困らせた。

そして、やっとの思いで部屋に到着してベッドに眠らせたのだ。

「それじゃあ、お休みなさい。ミサキさん」

アイチは部屋から出ようとする。

しかし、

ガシッ！

「え？」

「行かないで……」

アイチはミサキに腕を掴まれて動けなくなる。

「ミサキさん……?」

「行かないで!」

「うわぁっ!?!」

そのままミサキに腕を引っ張られてアイチはベッドに引きずり込まれた。

そして、ミサキは両腕でしっかりとアイチの体をホールドして逃がさないようにする。

「ミサキさん、どうしたんですか! ……ミサキさん?」

アイチは暗くてよく見えなかったが、ミサキの目から小さく光るモノが流れるのが見えた。

「私、怖いんだ……」

「怖い……?」

「最初はユナイテッド・サンクチュアリに来て遊び気分だったけど、私達を狙ってあんな怪物達が襲ってきた……アイチやみんなのお陰で助かったけど、これからどうなるんだろうって、不安になるんだよ……」

強がって今さっきまで一切の弱い心を見せなかったミサキだが、ミサキも一人の少女……恐怖や不安は当然あるのだ。

「ミサキさん……」

アイチは無意識に手を伸ばしてミサキを自分の胸に抱き寄せた。

「アイチ……？」

「大丈夫です。ミサキさんは一人じゃありません。僕やロイヤルパラディンとオラクルシンクタンクの皆さんがいます。必ず、僕がミサキさんを護りますから……」

「アイチ……ありがとう……」

ミサキの心から恐怖と不安が少し取り除かれ、そのままゆっくり眼を閉じて意識を手放す。

そして、アイチはミサキを抱きしめる力を少しだけ強くし、自分も眼を閉じて意識を手放した。

第5話 同盟作戦、開始！（前書き）

もうアイチとミサキさんがいちゃいちゃしすぎて申し訳ありません
（笑）

第5話 同盟作戦、開始！

翌朝、太陽の光が窓から差し込み、ミサキは目を覚ました。

「んう……朝……？」

まぶたを何回も開け閉めして、意識を覚醒させる。

すると……。

「アイチ……？」

自分の目の前には可愛らしい寝顔をしたアイチが眠っていた。

ミサキは叫びそうになったが、落ち着いて昨夜のことを思い出す。

（えっと……確か昨日は歓迎会でお酒をちょっと飲んで、それから……）

断片的に記憶が残っているため、何とか昨日の出来事を思い出す。

（アイチに迷惑をかけちゃったかな……よし）

ミサキは手で髪を後ろに持って行き、アイチに顔を近づけた。

チュッ。

ミサキの唇はアイチの頬に重なり、小さな音が部屋に響いた。

そして、アイチの頬から唇を離し、自分らしくない行動にミサキは顔を真っ赤にする。

「はぁ……顔洗お……」

ミサキはため息をついて、ベッドから降りようとする。

「あれ……ミサキさん？」

「っ！？」

アイチも目を覚まし、ミサキは危うくベッドから落ちそうになった。

「ア、ア、アイチ！？ お、おはよう！」

「あ、はい。おはようございます。眠れましたか？」

「う、うん。ま、まあ、アイチのお陰でね。それじゃあ、支度をしようか？」

「わかりました。じゃあ、僕は自分の部屋に戻りますね」

「わかった、後でね」

「はい」

アイチはミサキの部屋から退出する。

廊下を歩いていると、アイチは手で頬に触れる。

（ミサキさんの唇、柔らかかったな……）

実はミサキがキスしている時にアイチは半分起きていて、キスの感触を感じており、未だにほのかに残っている。

頬だが、初めての異性のキスに朝の間ずっとドキドキしているアイチだった。

その後、支度をして合流したアイチとミサキは食堂で朝食をとった。

数十人の騎士がミサキを見てビクビクして怖がっていたのは気のせいではなかった。

朝食を食べ終わると、二人はアルフレッドに呼ばれて執務室に向かった。

「やあ、おはよう。二人とも」

「おはようございます、アルフレッド」

「おはようー。それで、何のようなの？」

「うむ。これからどうすればいいのか話し合おうと思ってな」

アルフレッドはソファアーにアイチとミサキを座らせ、カップにコーヒーを注いで二人に渡す。

「私達は未だに敵の正体を知らない。唯一分かっているのは、人間界から惑星クレイに召喚された君たちヴァンガードを貪欲に欲しがっていることだ」

「もしかして、櫛君やカムイ君も……」

「ああ。情報によると奴らに襲われたが、かげろつとノヴァグラッブラーの戦士達が追いついたようだ」

「よかった……」

「とりあえず二人は無事みたいね……」

アイチとミサキは仲間が無事だと知ってとりあえず一安心する。

そして、アイチはアルフレッドにある提案をする。

「アルフレッド、僕に一つ考えがあります」

「考え？」

「はい。かげろつやノヴァグラッブラーと同盟を組んだらどうですか？」

「なっ……！？」

アイチの提案にアルフレッドは驚愕して言葉を失う。

「予言で確かこう言っていましたよね？ 世界の存亡をかけた大いなる戦が始まるって……だったら僕達の敵は共通です。なら、同盟を組んで一緒に戦うのはどうですか？」

アイチの考えは道理になっっているがアルフレッドは難しい表情を浮かべる。

「アイチ、君の考えは分かるが……かげろうとノヴァグラップライとの同盟は非常に難しいぞ」

「だから、僕達ヴァンガードがいるんですよ！ 櫛君とカムイ君と協力して僕達がそれぞれの組織を繋ぐ架け橋になるんです！」

「うっ……」

アイチの熱意に押されるアルフレッド。

「ふおおおお！ なかなか勇氣と行動力の少年ではないか、騎士王よ！」

そこに酒と杯を持った老人が外から窓へ侵入する。

「バロン殿！」

老人の名は“大いなる賢者 バロン”。

神々の時代から世界の全てを見続けてきた最古参の巨人族の賢者で

ある。

「騎士王よ。この子達の秘めたる可能性に賭けてみたらどうかの？」

「バロン殿、しかし……」

バロンは部屋に入り、片目を開いてアイチとミサキをじっくりと見る。

「ほほう、なかなか良い眼をした子じやの。まるで、若き日の騎士王達を思い出すのお」

自慢の白髭に触れながらバロンは懐かしむように呟く。

そして、アルフレッドを見つめて自分の意見を言う。

「騎士王。わしは長きに渡りこの世界を見てきたが一度も世界が一つになることはなかった。今こそ、この幼き子達の力を借りて世界を一つにする時じゃぞ！」

「バロン殿……わかりました。私は彼らの可能性を信じて賭けてみます！」

バロンに説得され、アルフレッドは決意した。

「ふおおおお！　そうかそうか。さて、それではワシはそろそろ退散するかの。早くしないとあのやかましいのが——」

「失礼します！　こちらに賢者バロンが——ああっ！　見つけましたよ、お師匠様——！」

執務室に入ってきたのは、自称バロンの一番弟子であるマロンである。

「げっ！ もう見つかってしもうたか……では、さらばじゃ、騎士王！ とおうー！」

バロンは入ってきたのは窓から飛び降りてマロンから逃走する。

「あつ！ お待ちください、お師匠様〜！」

マロンはバロンを追い掛けて窓から飛び降りる。

「ええい、わしはお前を弟子と認めておらんわ！ いい加減、誰か別の師を見つけれ！」

「そんなことを言わないでくださいよ、お師匠様〜！」

バロンとマロンの巨人族師弟賢者（？）追いかけてこはまだまだ続きそうだった。

嵐のように訪れて去った二人を見送ったアイチ達は取りあえず話し合いを続ける。

「では、まずはかげろうとノヴァグラップラーで話しやすい方から攻めていこう」

「だったら、カムイのいるノヴァグラップラーから先が良いんじゃない？ アイチを兄として慕っているんだし」

ミサキの提案にアイチは頷く。

「そうですね。カムイ君なら話をすぐに分かってくれて協力してくれそうですから」

「決まりだな。すぐにノヴァグラップラーの本拠地である“スター・ゲート”までの船を用意する。二人はブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガス殿に今の事を話してくれ」

「はい！」

アイチとミサキは執務室から出ると、すぐにブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスに今の話を伝えた。

「そうか。騎士王が遂に決断したか……よし、今すぐに行動可能な者達を集める！」

「私もアマテラス様に連絡してバトルシスターを呼んでもらいます！」

こうして、未知なる敵に対抗するために今まで協力することのなかった巨大組織との同盟作戦が始まった。

ロイヤルパライディンからはブラスター・ブレード、沈黙の騎士 ギャラティン、ういんがる。

更に、ピンク色のハイビーストである“ふろろがる”が護衛に就く。

オラクルシンクタンクからはバトルシスター もか、バトルシスター ここあ、バトルシスター しょこら。

そして、ミサキと最も思い出のあるユニットが護衛に就いた。

「ツクヨミ……」

それは、小さな可愛らしい少女の姿をした女神“三日月の女神”
ツクヨミ”である。

「ミサキ〜」

ツクヨミはテテと走り出してミサキに抱きついた。

「会いたかったよ、ミサキ〜」

「私も会いたかったわ、ツクヨミ」

「これからは私がミサキを守るからね！ ミサキに手を出す奴がい
たらすぐに一拍子呼んで最終形態になって倒すんだから！」

「頼もしいわ。ありがとう、ツクヨミ」

ミサキはツクヨミを優しく抱きしめる。

ツクヨミはミサキの亡くなった両親が生前残したデッキの切り札で
あり、ミサキにとっては両親との大切な思い出そのものである。

そのツクヨミと出会えてミサキは本当に嬉しいのだ。

（良かったですね、ミサキさん）

アイチは微笑ましい光景を見守る。

そして、護衛のメンバーが揃ったところでスター・ゲートまでの移動手段をアルフレッドが見せる。

「これがロイヤルパラディンの技術開発部が造り上げた飛行機。その名も……“ペンドラゴン”だ！」

地面が真つ二つに割れ、中から巨大な飛行機が出現した。

最新鋭の魔法と科学によって造られたロイヤルパラディンの技術開発部懇親の力作である。

アイチ達が関心と驚きの表情をすると、アルフレッドはアイチに何かを渡す。

それは綺麗な輝きを放つサファイアの指輪だった。

「御守りです。ある魔法が込められているので困った時に役に立ちます」

「ありがとうございます、アルフレッド」

アイチは魔法の指輪を右手の人差し指に填める。

「武運を祈っています」

アイチ達はアルフレッドと別れてペンドラゴンに乗り込む。

それぞれが席に座ると、自動的にエンジンが起動して動き出す。

ペンドラゴンは目的地を設定すれば自動で向かう人工智能が搭載されているのだ。

ブラスター・ブレードが目的地を設定する。

「目的地は最南の大陸、スター・ゲート」

目的地の座標が設定され、ペンドラゴンは上昇してそのままスター・ゲートまで出発し、ユナイテッド・サンクチュアリを離れる。

そして、ペンドラゴンが見えなくなるまで見送っていたアルフレッドはある言葉を呟く。

「そう言えば、見送ると言っていたアマテラス殿はどこに行かれたのだろうか……?」

アルフレッドは疑問を持ちながら執務室に戻る。

その答えがペンドラゴンの中にあるとは知らずに……。

第5話 同盟作戦、開始！（後書き）

と言うわけで、次回からスター・ゲートに向かい、カムイ君と再会します。

かげろうのドラゴン・エンパイヤはその後にしますので、櫛君はまだ出ません。

第6話 最南の皇帝（前書き）

今回から題してスター・ゲート編です。

遂にカムイ君の登場です！

第6話 最南の皇帝

アイチ達はカムイの再会とノヴァグラップラーの同盟を組むために惑星クレイ最南の大陸、スター・ゲートに訪れた。

ペンドラゴンをスター・ゲートにある森に隠すと、アイチ達はノヴァグラップラーのスタジオがあるスター・ゲートの中心都市に向かった。

「わあ、ここがスター・ゲート」

「凄い、まるでSF映画の世界ね」

アイチとミサキはユニテッド・サンクチュアリとはまた違ったSF映画さながらの近未来都市に驚きと感動を得ていた。

ブラスター・ブレード達も初めて訪れる都市で同じ心境だった。

「なかなか面白い都市じゃの〜」

「……………えっ？」

後ろから聞き慣れた声が聞こえ、アイチ達が振り向くと、そこには動きやすい和服を見に包んだアマテラスが珍しそうに周りを見ていた。

「アマテラス様！？ どうしてあなた様がここにいるんですか！？」

ロゼンジ・メイガスが非常に焦って困った表情でアマテラスに問い

つめる。

「我は生まれてこの方、ユナイテッド・サンクチュアリから出たことがないのじゃ。良い機会じゃから、ミサキ達の護衛を含めて見聞を広めておこうと思つての。こつそりペンドラゴンに入つて隠れていたのじゃ」

アマテラスは扇子を広げて笑みを浮かべた。

そんなアマテラスの態度にロゼンジ・メイガスは沸々と何かがこみ上げてくる。

「この……大馬鹿社長！！！」

バコーン！

ロゼンジ・メイガスは所持している杖でアマテラスの頭を思いっきり叩いた。

「い、痛い！ なっ、何をするのじゃ、ロゼンジよ！？」

アマテラスは叩かれた頭を手で押さえてロゼンジ・メイガスを睨みつけるが、逆にロゼンジ・メイガスが鋭い眼孔で睨み返した。

「アマテラス様！ あなたは自分のお立場をわかつておられるのですか！？ あなたはオラクルシンクタンクの社長なのですよ！ その社長がこんな自分勝手なことをして許されると思うのですか！？ 今頃社内ではあなたがいなくなつて大騒ぎですよ！！」

ロゼンジ・メイガスはアマテラスの勝手な行動に激怒して説教をし

始めた。

「うつ、だって、だって……」

「だってじゃありません！ だいたいあなたは自分が社長だと自覚して——」

「はいはい、そこでストップよ」

ミサキがアマテラスとロゼンジ・メイガスの間に入る。

「ミサキ様……」

「ロゼンジ、気持ちは分かるけどもう良いんじゃない？」

「ですが……」

「ロゼンジ殿、それ以上アマテラス殿を怒られては可哀想です。その辺にしておいたら如何ですか？」

ブラスター・ブレードも加わり、ロゼンジ・メイガスはため息をついて遂に折れる。

「はぁ……わかりました。アマテラス様、ヴァンガード様達の護衛として同行するのはわかりましたが、すぐに本社に連絡してください。まずはそれからです」

「う、うむ。わ、わかったのじゃ……」

アマテラスは目尻に涙を浮かべながらコクコクと頷いた。

まるで、母親に叱られた娘みたいな光景だった。

（これじゃあ、どっちが上か分からないじゃないの……すっかりしなさいね、アマテラス）

オラクルシンクタンクの神の一柱であるツクヨミは苦笑を浮かべながら、やれやれと首を横に小さく振る。

それからすぐにアマテラスはオラクルシンクタンク本社に連絡して社員に無事だという事を伝えて、ノヴァグラップラーのスタジオムへと向かう。

アマテラスは惑星クレイの限られた人しか使えないブラックカードを取り出してスタジオムの高級チケットを購入した。

流星は大企業の社長だけあって、お金は余るほど所持しているのだった。

「さて、まずはカムイ君を探さないですね」

「そうだけど……どうやって？」

「それなら私に考えがあるわ！」

「ふろうつがる？」

ふろうつがるが何か考えがあるらしく、全員の視線が向けられる。

「アイチ達ヴァンガードは私達惑星クレイの住人とは全く違う匂い

を体から出しているのよ。それと同じ匂いを私と、ういんがるが探せばきつと見つかるわ!」

「ふーん、上手くいくのかよ?」

ういんがるが言つと、ふろつがるが声を強めて言つ。

「やるしかないでしょ! あんたも誇り高きロイヤルパラディンのハイビーストなら協力しなさい!」

「わ、わかったよ! それじゃあ……あつ、見つかった」

「「早つ!?!?」」

意外にもあつさりカムイの匂いを嗅ぎ付けた。

「クンクン。本当ね……皆さん、付いて来てください」

ふろつがるも匂いを嗅ぎ付け、ういんがると一緒にその匂いを追う。匂いを追うとそこはノヴァグラップラーの上級戦士達の部屋が集うエリアだった。

ノヴァグラップラーにとっては重要なエリアなので、当然警備員に止められる。

「ここから先は関係者以外、立ち入り禁止だ!」

「お客様、スタジオムにお戻り下さい!」

警備員はアイチ達を追い返そうとするが、ブラスター・ブレードとアマテラスが前に出る。

「失礼、申し訳ないがノヴァグラップラーの皇帝殿に伝えてはくれないか？」

「ロイヤルパラディンとオラクルシンクタンクのヴァンガードがノヴァグラップラーのヴァンガードに会いに来た、とな」

「そう簡単にカイザー様に伝えるなど……ヴァンガード？ はっ！
？ 待て、あなた方はまさか！？」

「ユナйтеッド・サンクチュアリの英雄ブラスター・ブレード殿とオラクルシンクタンクの社長アマテラス殿！？ しょ、少々お待ちください！」

二人がユナйтеッド・サンクチュアリの大物人物だと知ると、警備員二人は急いで連絡を取った。

数分後、奥から小さな影が走ってくる。

「アイチお兄さん！ ミサキさん！！！」

その小さく元気な姿はアイチやミサキと同じく、惑星クレイに選ばれたノヴァグラップラーのヴァンガード、カムイである。

「カムイ君！」

「カムイ！」

「良かった、二人は無事で！」

「カムイ君も無事で良かったね」

「再会早々悪いけど、あんたに協力してもらいたいことがあるんだけど、良いかな？」

アイチとミサキは同盟の話をカムイにすると、カムイは親指を立ててグッドサインをみせる。

「オッケーです！　そう言うことなら喜んで俺様も協力します！！」

「ありがとう、カムイ君」

「それじゃあ、ノヴァグラップラーの皇帝に会わせませうね。付いてきてください」

カムイの案内で廊下の奥を進むと、数々のノヴァグラップラーの戦士の姿が彫られた巨大な扉があった。

扉を開くと、そこには一人のバトロイドがいた。

「カムイよ。客人の出迎え、ご苦労である」

真紅の鎧を身に纏う六本腕の鬼神にしてノヴァグラップラーの皇帝“アシュラ・カイザー”である。

「お初にお目にかかれる客人殿。俺様はアシュラ・カイザー。このノヴァグラップラーの頂点に君臨する皇帝だ」

「アシュラ・カイザーよ。最近の経済状況はどうじゃ？ まあ、聞かなくてもわかるかの」

アマテラスが不敵な笑みを浮かべると、アシュラ・カイザーはケラケラと笑い飛ばす。

「あんたのお陰で毎日客が溢れかえって売上上々だぞ、アマテラスだが、まさかあんたが来るとは想定外だったかな」

「社長として見聞を広める為じゃ」

「なるほど。それで、今日は何のようだ？ 見たところ、ロイヤルパラデインの名のある騎士を二人も連れてきているとなると、何か重要な話らしいな」

アシュラ・カイザーはブラスター・ブレードとギアラティンを横目で睨みながら言う。

「まあ、お主にちょっとした話があるだけじゃ。悪い話ではないぞ」

「ふむ。お前がそう言うなら聞いてやるぞ」

アシュラ・カイザーは偉そうな態度を取るが、悪人ではないので、素直に同盟の話を聞く。

「なるほど、同盟か……確かに、カムイに襲ってきた敵は俺が今までに闘ったことのない奴だった。しかも、そっちの予言では大いなる戦が始まると出ている。予測しづらいこれからのことを悪くはない話だな」

アシュラ・カイザーはうんうんと頷き、同盟に同意的な態度を見せる。

だが、アシュラ・カイザーはブラスター・ブレードとギャラティンを見ると、ニヤリと少々不気味な笑みを浮かべながら立ち上がる。

そして、手を広げると部屋の壁に掛けられた六つの武器がアシュラ・カイザーの元に集まった。

「ブルアアアアアアアアアッ！！！！」

アシュラ・カイザーは全力でブラスター・ブレードとギャラティンに切りかかる。

「ギャラティン！」

「はっ！」

ブラスター・ブレードとギャラティンは鞘から剣を抜き、アシュラ・カイザーの攻撃を防ぐ。

「ロゼンジ！」

「ロゼンジ・シールド！！」

アマテラスが叫ぶと、ロゼンジ・メイガスが防護シールドを展開する。

「早く、私の後ろに！」

ミサキは防護シールドに向かうが、アイチとカムイはその場で立ち止まってアシュラ・カイザーに向けて抗議する。

「おい！ アシュラ・カイザー！ てめえ、何でいきなりブラスタ―・ブレード達に攻撃するんだ！！」

「そうですよ！ あなたは同盟に同意するつもりは無いんですか！？」

「ふん！ 俺様はロイヤルパラディンに同盟するだけの力を確かめたいだけだ！ 弱ければ同盟の意味が全くないからな！」

「そう言うことか……ならば！」

「我々の力を……証明するのみ！」

ブラスタ―・ブレードとギャラティンは全身に力を込めてアシュラ・カイザーの武器を押し返す。

「グオッ！？」

「ピンポイントバースト！」

ブラスタ―・ブレードの剣が左右に展開され、一筋の光線が射出される。

光線はアシュラ・カイザーの短剣に直撃すると、粉々に粉碎する。

「やるな！ ユナイテッド・サンクチュアリの英雄！！ だが、まだ俺様はこの程度では敗れん。行くぞ！」

「ういんがる、ふろうがる、後方支援だ！」
フースト

「おうよ！ グルアアアアアッ！！」

「わかりました！ ワオオオオオン！！」

ういんがるとふろうがるは雄叫びを上げると、ブラスター・ブレードとギヤラティンに力を支援する。

アシユラ・カイザーは五つの武器にエネルギーをチャージして振りを上げる。

「ならば、俺様の最強技でケリをつけてやる！ 百撃必殺！！」

ノヴァグラップラーの皇帝アシユラ・カイザーの必殺技が発動しようとしたその時だった。

キュイイイイーン！！！！

アイチの指輪が強烈な輝きを放ち、床に魔法の文字と科学の式が融合した陣が配置された。

「アルフレッドから貰った指輪が！？」

そして、陣は大きく広がると、中から何かが現れて飛び出した。

「グレートソードアタック！！！！」

斬撃が飛び、アシユラ・カイザーに直撃する。

「オバアアアアア！？」

斬撃をまともに喰らい、ぶっ飛ばされるように壁に激突する。

「失礼。私の信頼する騎士達が危機に陥り、つい出てきて剣を振るってしまった」

「アルフレッド！？」

陣から現れたのはユナイテッド・サンクチュアリにいるはずのアルフレッドだった。

そして、アルフレッドが跨っているのは、燃えるような獅子のたてがみを持つ青い毛の名馬にして幻獣と呼ばれる騎士王の愛馬“ライオンメイン・スタリオン”。

「グオオオ……なるほど、貴様が歴代最強と謡われたロイヤルパラディンの騎士王か……」

壁に激突されたアシユラ・カイザーは不意打ちを喰らいながらも立ち上がった。

「お初にお目にかかれます。ノヴァグラップラーの皇帝アシユラ・カイザー殿。今までの話は全てアイチの指輪を通して全て聞いていました。そこで、私から一つ提案があります」

「提案だと……？　言ってみろ！」

アルフレッドはにっこりと微笑む。

「はい。ノヴァグラップラーのバトルシステムの一つ、タッグバトルでこの話の決着をつけませんか？」

タッグバトル。

それは、二人一組でタッグを組んで闘う数あるノヴァグラップラーのバトルシステムの一つである。

「タッグバトル？ 貴様は誰と組むのだ？」

「はい。私のパートナーは……私の最も信頼する最高の騎士、ブラスター・ブレードです！」

「えっ！？ ア、アルフレッド！？」

ブラスター・ブレードは敬語を忘れて素に戻って驚いた。

そして数日後、ノヴァグラップラーの歴史に残る素晴らしい闘いが行われる事になるのだった……。

第6話 最南の皇帝（後書き）

次回、アルフレッド&ブラスター・ブレードのタッグでアシュラ・カイザーに挑みます！

ちなみに、アシュラ・カイザーのパートナーは……お楽しみにしてください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5913y/>

カードファイト！！ ヴァンガード ～次元と未来を繋ぐ永久の絆～

2011年11月21日18時55分発行